

世界的なマグロの獲り過ぎ

見えてきた解決策、早急な実施を

2011年8月22日 みなと新聞 掲載

◆グローバルな過剰漁獲◆

大西洋のクロマグロ、メバチ、中西部太平洋のメバチ、キハダ、そしてミナミマグロと厳しい漁獲規制が行われている。太平洋のクロマグロも、その仲間に入りかねない。規制は漁業者に重い負担となるばかりでなく、日本のサシミ市場への供給にも不安を抱かせる。その原因は、世界的なマグロの獲りすぎだ。背景には、グローバルに過剰となっている漁獲能力の問題がある。

◆先進国巻網漁獲能力凍結を勧告◆

7月12日から14日、ラホヤ（米国）で開催された第三回マグロ資源管理機関（RFMO）合同会議（神戸Ⅲ）は、「過剰漁獲能力問題」解決への明確な道筋をつける勧告を採択した。これまで2回おこなわれた合同会議で、「この問題は早急に解決しなければならない」との認識は一致。だが、その具体策になると、各国の思惑・利害は一致せず、進展は見られなかった。特に、先進国と発展途上国の立場の相違は、大きく、当分、解決は見込めないようにも思われた。このままでは、マグロ資源の過剰漁獲は、止まらないのではないかと憂慮の念を募らせる関係者も多かった。そんな状況の下で、よく、この勧告が採択されたと思う。特に、「先進国の大型まき網漁船の漁獲能力を凍結する」との勧告の意義は大きい。

◆先進国も途上国も一致◆

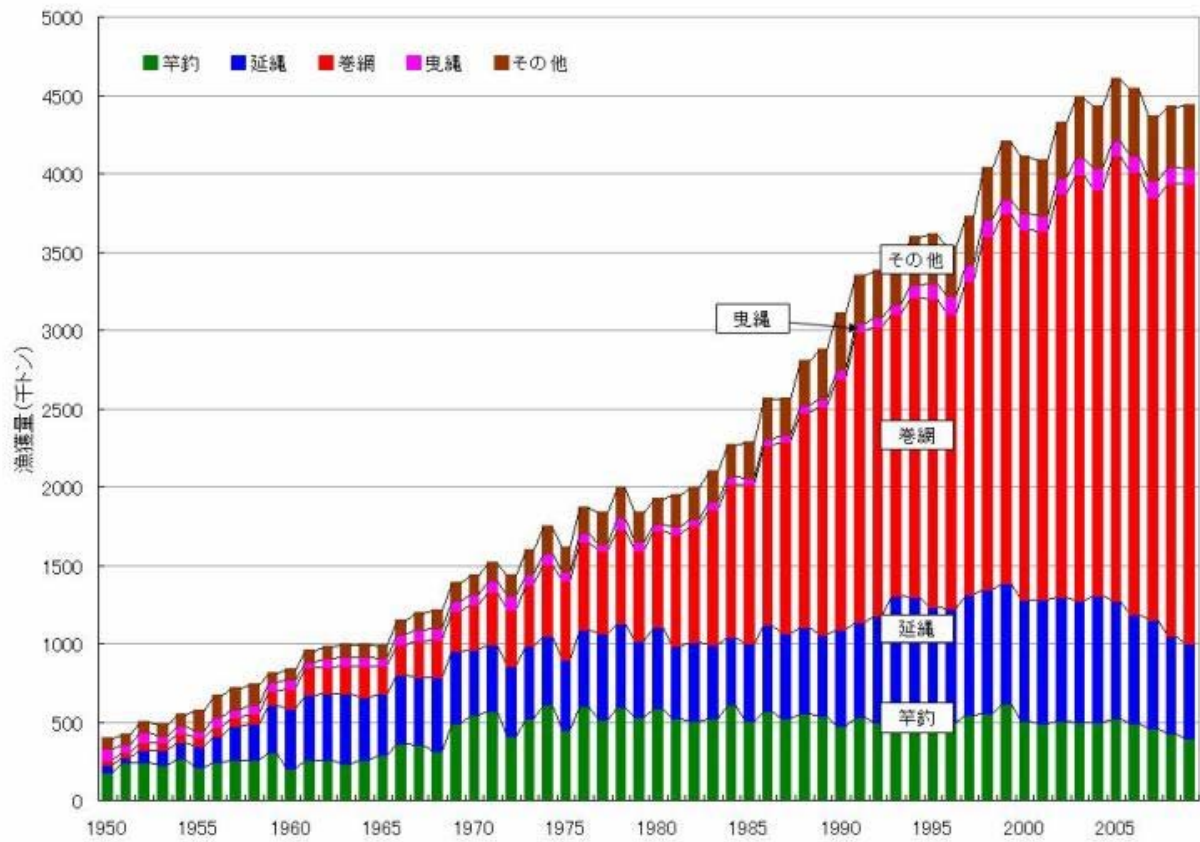
拡大を続ける大型まき網漁船の漁獲能力は、そのFADs（人工浮き魚礁）の使用がもたらす小型メバチ・キハダの混獲問題も含め、放置しておけば、いずれの漁法も（まき網も含め）、近い将来、商業的なまぐろ漁業の持続が困難となりかねない。そのことを、解っていても、誰もこの拡大を止められなかった。今回の会議で、先進国が、一致して自らの痛みを堪えて、問題解決を図る意思を示したことは、自国のマグロ漁業発展の権利の確保に懸命な途上国も、問題解決へ協力せざるを得ないとの認識をもたらしたはずであり、ここにきて、ようやく、先進国も途上国も一致して問題の具体的解決に取り組もうとする国際的な基盤が成立したと思える。

◆勧告実施に外交努力を◆

この機を逃さず、各RFMOにおいて勧告を早急に具体化し、実行に移してもらいたい。少なくとも、「先進国の大型まき網漁船の漁獲能力の凍結」は、この会議に参加した全ての先進国が賛同したのであるから、その気になれば、直ちにでも、実行可能であろう。一方、もし勧告を実行せず、いつまでも、たな晒しにしておけば、マグロ資源の回復が遅れるばかりではなく、各資源管理機関の資源管理能力の不確かさを国際社会に晒すこととなる。これは、ワシントン条約によるマグロの商業取引全面禁止につながる道だ。勧告の実施に向けて日本（水産庁）の外交努力に大いに期待する。

世界の漁法別マグロ類総生産量

(1950~2009年)



注：(1) マグロ類には、クロマグロ、ミナミマグロ、メバチ、キハダ、ビンナガ、かつおを含む。

(2) 出典：RFMOs、編集 三宅